

5.6 大きな噴石のハザードマップ

気象庁では、噴火によって火口から吹き飛ばされる防災上警戒・注意すべき大きさの岩石を噴石と呼んでおり、防災上の観点から「大きな噴石」および「小さな噴石」に区分している。ここでは、概ね 20～30cm 以上の、風の影響をほとんど受けず弾道を描いて飛散する「大きな噴石」をハザードとした。

大きな噴石は火口位置や初速、直径などの条件を仮定すれば弾道計算により到達地点をある程度想定することが可能ではあるが、上記の条件をあらかじめ設定することは困難であり、また個々の大きな噴石では影響範囲が点であるため、ドリルマップは作成せず、可能性マップのみを作成した。

大きな噴石の到達範囲については平成 16 年版報告書以降新たな知見が得られていないため、上記に基づき宝永噴火の事例から大規模なプリニー式噴火による大きな噴石の到達範囲を最大 4 km とした。また、中・小規模で想定されるストロンボリ式噴火による大きな噴石の到達距離については、ブルカノ式噴火による大きな噴石の平均的な到達距離と同等かそれより小さいと推測し、桜島の近年の山頂噴火による大きな噴石の到達範囲を参考に最大 2 km とした。

以上により、大きな噴石の可能性マップは、大規模噴火の想定火口範囲から 4 km、中小規模噴火の想定火口範囲から 2 km の範囲を包絡する範囲として作成した(図 5.6-1)。

表 5.6-1 大きな噴石のハザードマップとして作成したマップ

噴石	到達範囲	到達時間	流動深	危険度
ドリルマップ	—	—	—	—
ドリルマップ重ね合わせ	—	—	—	—
可能性マップ	○	×	—	×
可能性+ドリルマップ重ね合わせ	—	—	—	—

—：適用外

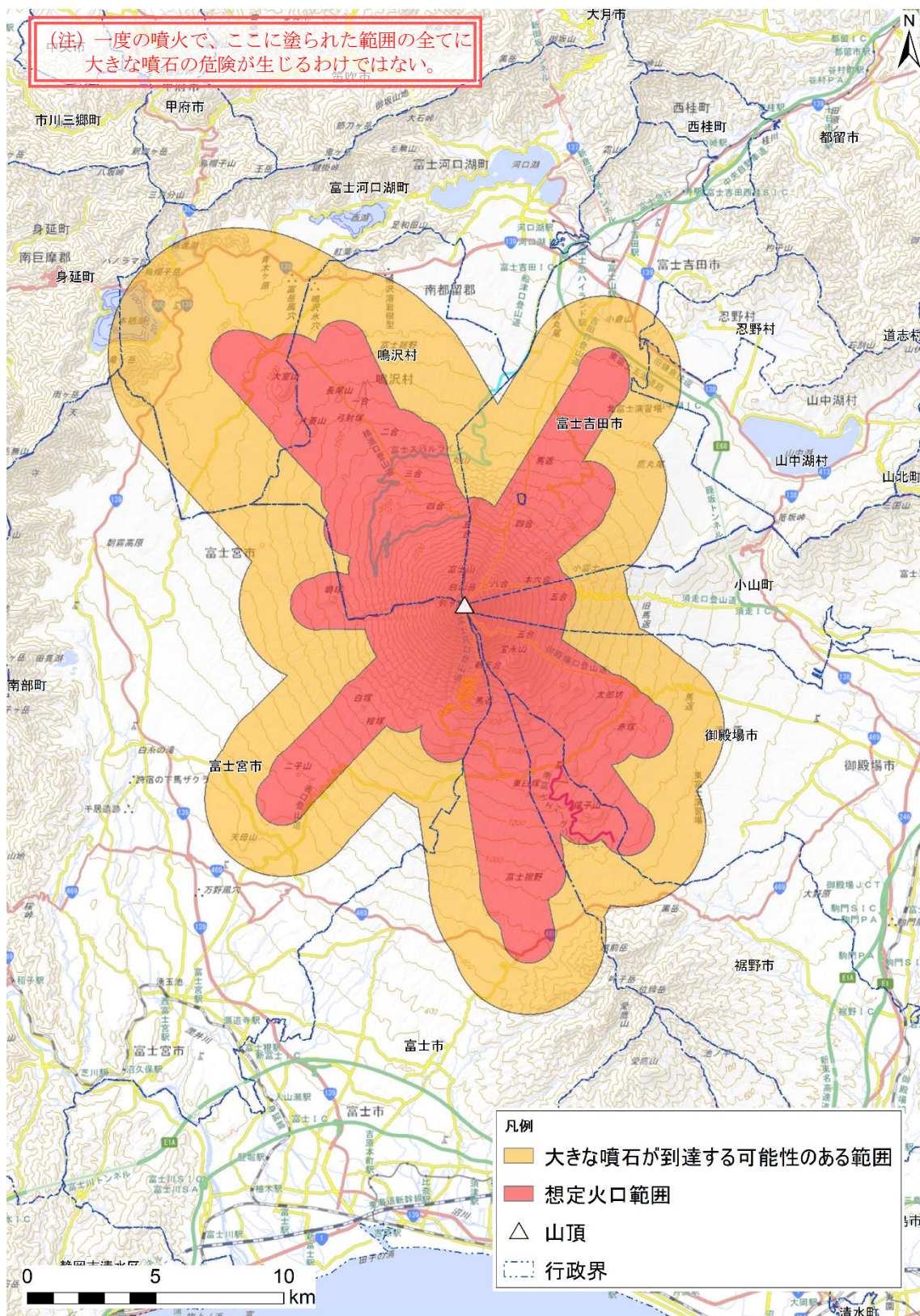


図 5.6-1 大きな噴石の可能性マップ

【参考】

平成 16 年版報告書での噴石可能性マップ

